

## 特別講演

### 医療とジェンダー: メディカル、コメディカルの連携のなかで

東京大学名誉教授・認定NPO法人ウイメンズアクションネットワーク (WAN) 理事長  
上野 千鶴子 先生



#### 【ご略歴】

社会学者・東京大学名誉教授・認定NPO法人ウイメンズアクションネットワーク (WAN) 理事長。1948年富山県生まれ。京都大学大学院社会学博士課程修了。社会学博士。平安女学院短期大学助教授、シカゴ大学人類学部客員研究員、京都精華大学助教授、ボン大学客員教授、コロンビア大学客員教授、メキシコ大学院大学客員教授等を経る。1993年東京大学文学部助教授、1995年同人文社会系研究科教授。2012年立命館大学特別招聘教授。元学術会議会員。専門は女性学・ジェンダー研究。高齢者の介護とケアも研究テーマとしている。

『当事者主権』（中西正司と共著、岩波新書）、『ケアの社会学』（太田出版）『おひとりさまの老後』『男おひとりさま道』（法研）、『おひとりさまの最期』（朝日新聞出版）、『在宅ひとり死のススメ』（文春新書）『おひとりさまの逆襲』（小島美里と共著、ビジネス社）『史上最悪の介護保険改定?』（岩波ブックレット）等がある。

#### 【上野千鶴子先生からのメッセージ】

医療の世界には細分化されたコメディカルの専門職がいます。

放射線技師もそのひとつですが、必要で大切な役割にもかかわらず、患者からは見えない存在になっています。その職種にも女性が増えてきました。

コメディカルの専門職が誇りを持って、とりわけ女性が一生の仕事として継続していける条件は何でしょうか。ごいっしょに考えてみたいと思います。

#### 【大会長 佐藤晴美からのメッセージ】

私が初めて上野千鶴子先生のことを知ったのは、TVのNEWSでした。2019年4月12日の東京大学入学式で（某私大医学部の不正入試があり性差別があった後）「頑張ったら報われると思えるのは、努力の成果ではなく、環境のおかげだったことを忘れないで、恵まれた環境と能力を自分が勝ち抜くためではなく、助けるために使って欲しい」と祝辞を述べたことが話題になったのです。

上野先生は「フェミニズム」、「多様性」、「アンコンシャス・バイアス（無意識のへんげん・思い込み）」などを東京大学新入生たちに語りかけ、どう生きるのかと問いかけています。

私は先生のことを知りたくて、著書「あなたの会社、その働き方は幸せですか?」「女の子はどう生きるか」など数冊を読みました。そこには、これまで私の中のモヤモヤしたものへの答えがたくさんありました。

さて、私たちは近年【ダイバーシティ】という言葉、いろいろな場面で耳にしますが、私たちは【ダイバーシティ】を本当に理解しているのでしょうか？答えは一つではありません。

社会の重要なポストに1/4制（クォーター性）という枠を敷いてでも、女性が重要な位置を担うことが求められていますが、このことは、女性たちは屈辱として受け止め、チャンスとして発奮するべきなのです。

のびのびと、その人らしく医療人として、社会人として自分の役割を果たしていきましょう。